



病院皮膚科の存在感

竹之内辰也

新潟県立がんセンター新潟病院副院長

現在の病院に勤め始めて、今年で28年になります。還暦となった人生の半分近くをここで過ごしてきたため、病院への愛着は人一倍強いです。とはいえ、赴任当初の周囲からの扱いは厳しいものでした。他科の部長はすべてベテランでしたので、卒後10年目の自分などは当然ながら新米扱いで、しかも皮膚科というだけで病棟や手術室などでコメディカルからも軽視されていました。その状況を変えるべく、まずは診療業績の向上に注力しました。

最初の5年で手術件数を50%増やし、新規の皮膚がん症例数を倍増させましたが、いかんせん診療単価が低いうえに、かつマイナーがんであるために何のインパクトもなく、自分の立ち位置も変わりませんでした。

そんなときに転機となったのが、2002年に始まった褥瘡対策の義務化でした。院内に褥瘡対策チームを設置する必要が生じ、自分と看護師の2名で始めることになりました。最初は嫌々でしたが、予防計画書や対策マニュアルの作成などが意外と面白く、院内での啓発活動を通じて周囲からのリスペクトの目線を少しずつ感じるようになりました。

それからは他科や他職種との横断的な院内活動に力を入れるようになり、分子標的薬の登場により注目されるようになった皮膚障害管理についても、勉強会を催して啓発活動を行いました。

そんな様子に目を付けられたようで、院長から

電子カルテシステムの新規導入における運用ワーキングのリーダーを命じられました。とはいえ聞こえはよいのですが、実際には紙カルテ命のアナログ医者からのクレームを吸収するサンドバッグ役であり、ひたすら皆さんに頭を下げ続けました。

その数年後に管理職になってからも、便利屋として上から頼まれる泥臭い仕事を引き受け続けて現在に至っています。病院のために汗をかいてきた論功行賞なのかどうかはわかりませんが、皮膚科の常勤医は当時の2名から5名に増えました。交替で赴任する皮膚科専攻医の皆さんには、自分がかつて経験したような肩身の狭い思いはさせていないと思います。

勤務医の中には診療外の院内業務を余分な仕事として忌み嫌う人も多いですが、病院の運営に携わることで医療従事者としての視野が広がります。また、周りから目に見える形での院内貢献をすることで皮膚科の存在感も高まり、日々の診療もしやすくなります。皮膚科の勤務医として長く働きたい方には、ぜひ積極的に病院運営に関わることをお勧めします。